

もあり、その感情は罪の浄化につながる。これを神の恩寵と見ることが遠藤の「汎神論」の性質であると私は解釈している。

遠藤の語る「汎神性」の性格は、受動的、個即全、非対立と要約される。遠藤はフランス留学中すでに、自身が表現する「日本的汎神性」を、「吸収へのあこがれ」、「甘ったれ精神」、「東洋的諦念」と批判的に分析している。それでも、「いかなる西欧の思潮といえども僕等の文学に移入される時には、まず形而下的には日本の社会的地盤によって屈折され、更に形而上的には日本の汎神的地盤によって溶解されてしまう」ことは免れ得ないと断言している。

こうした第一段階のキリスト教の実生化における準備段階を経て、一九六六年に『沈黙（日向の匂い）』が発表された。この作品において、「日本的汎神性」は、溶解力を持つ魔力として、「毒草」「蜘蛛の巣」「泥沼」といったメタファーで表現され、「日本泥沼論」として提示される。『沈黙』に登場する四人の主人公は日本的汎神性に取り込まれた棄教者、西洋キリスト教の視点から見れば、弱者、裏切り者、背教者である。しかし、遠藤は、そのような弱者すべてをも包み、愛してやまない神の語りを、自然描写において描いた。そして、終に「日本的汎神性」という、日本の精神的土壌において育まれた精神構造をも抱擁する「母なるもの」として、積極的な神のイメージを提起したのである。

遠藤の「母なるもの」の思想は文化的、時代的、また個人的な体験というコンテキストにおいて構成されたものである。しかしそこから展開される、「日本的汎神世界」に遠藤が見出し

た無限な愛とその大いなる働きに抱擁されたいという感覚は、遠藤の「直接経験」であった。遠藤が語る「母なるもの」とは、自らの弱さ（罪深さ）を謙虚に自覚する者に向けられる赦しの眼差し、つまり個人の神秘的経験から導き出された宗教言語である。「母なるもの」とは聖なるものの体験が言語化されたヌミノーズである。この魂の領域においては、いかなるジェンダー論も介入していない。

日本人キリスト者に与えられた十字架としての「日本的汎神性」と、そこに存在する「東洋的諦念」および「虚無的な感覚」の「怖ろしさ」は、愛が徹頭徹尾、復讐ではなく許しであるという思想によって、また絶対的な愛と許し、抱擁の原理と和合の思想から導きだされる「母なるもの」によって救済される。愛の原型と普遍的な真理・救済は、人類に共通であると考ええる立場からすれば、遠藤が日本の宗教多元性文化において見出した「母なるもの」の思想は、地域・文化・民族・時代を超えたキリスト教の本質的信仰を表現するものとして、また人類志向にいたる道として、大いに評価されうるものとなる。

神谷美恵子の宗教思想

——『生きがいについて』の射程——

釘宮 明 美

『生きがいについて』の著者であり、精神科医としてハンセン病医療に携わった神谷美恵子（一九一四—一九七九年）は、

第4部会

二十歳前後の頃に無教会独立伝道師であった叔父に連れられて多磨全生園を訪れた際、「苦しむ人、悲しむ人のところにしか自分の居どころはない」と一瞬のうちに将来を思い定める。彼女の未公開の遺稿を調査した太田雄三は、その時期の神谷自身が完全に生きる意義を喪失するほどの苦悩の体験者であり、直接の原因となったのが彼女に純粹な愛を寄せながらも現実には思いを交わすことなく終わった野村一彦との恋とその死であったこと、そしてこの体験にそれ以後の実践のみならず、後の著作活動を貫く原点があることを指摘している（『喪失からの出発——神谷美恵子のこと』岩波書店、二〇〇一年）。

神谷を他から際立たせるのは、何よりも「限界状況」に生きる者として「ハンセン病患者と自分を同じ側に置く」点であろう。神谷は後に『生きがいについて』の中でヤスパースの言葉による「限界状況」として、「難病にかかること」「愛する者に死なれること」「人生への夢がこわれること」「罪を犯したこと」「死と直面すること」の五つを挙げているが、ここには愛する者の死と結核罹患という精神的にも身体的にも死の淵に直面し、そこから再びの生を与えられた彼女自身の原体験が反映されている。なぜ死に逝く者がいる一方で、自身は癒され生かされたのか。「何故、私たちではなくあなたが？」自らの生の代償として彼らの「苦しみと悲しみの十字架」を引き受けるとき、愛は死をも反転させ特定の一個人を超えて、普遍的で絶対的な意味にまで深められる。書くことへの止み難い欲求をもっていた神谷は、自らの認識と人間の探求という必然性もあつて精神医学を選び、臨床の現場で患者と向き合う中から「魂の

認識へ献身」した。この「認識」とは、対象として抽象的にわかることではない。相手に己を分かち与え、共に生き共に苦しむ、すなわち「co共に-nature生まれる」という意味で「conature 認識する」ことに他ならない。

神谷が長島愛生園で出会った患者は、療養所内でも精神疾患ゆえに医療の対象から除外されていた人々であり、彼らの心の問題を通して実存的な範疇に属する問題に直面させられる。なぜこの世に苦しみが存在するのか。「限界状況」に置かれた人間が、もしそれを乗り越えうるならばどのようにそれに反応し克服するのか。これらの問いが生きる意味や意義についての探求の著『生きがいについて』に結実する。そこでは、生の負の局面から人間の生きる意義が逆照射される。人が苦しみの意味を求め血みどろな葛藤と探求を経た上で、それを受容し再び新しい生きがいを精神の世界に見出さるまでの内的変化を、神谷は「変身体験」と呼んだ。精神的な変身体験は生存全体に対して最も広く深い浸透性をもち、生の基盤そのものから人の生き方を変化させるものであるがゆえに、宗教的な領域に近接する。神谷は宗教を特定の実定宗教を意味する以前の「人間の心のあり方」に還元させ、人間の精神全体が宗教の世界に包摂されているか、接しているのではないかと人間存在そのものもつ宗教性へ目を向ける。この人間を超越したものから注がれる配慮、それを人間の言葉では「愛」や「慈悲」と表現する他なものであるが、誰もが「愛へのかわき」をもち、その実体を説明し尽くすことはできないにせよ、人間を超えたものの絶対的な愛を信じるのがこの渇きを満たすのに十分であり、それ

が満たされて初めて人間の心は命に満たされ、それが外に溢れ出さずにはいられないのだと洞察している。この超越と人間が接し交わる場とは、人間が命に与り生かされている根源、誰によっても侵しえない人間の尊厳が由来するところを指し示しているといえよう。

内村鑑三とA・J・ヘッセル

——楕円の一神教思想について——

手島 勲 矢

個人的には交わることがなかった日本とユダヤの二人の思想家、すなわちキリスト者内村鑑三（一八六一—一九三〇年）とユダヤ教徒A・J・ヘッセル（A. J. Heschel 一九〇七—一九七二年）は、奇妙なことに「楕円」というキーワードを共有して、きわめて似通った——それでいて、それぞれの個性が際立つ——思想を展開している。当該発表は、その両者の本格的な比較研究に向けての、準備的、初学的考察を述べるにとどまるものであるが、内村とヘッセルの比較研究は、ある意味、従来、閉じられた文脈の中で行われてきたユダヤ思想の特殊性と普遍性についての議論に外部より新しい光を当てるものになると考える。

内村鑑三が一九二九年十月に『聖書之研究』誌上で発表した短文「楕円形の話」は、「真理は円形に非ず楕円形である。一個の中心の周囲に画かるべき者に非ずして、二個の中心の周囲

に画かるべき者である」という言葉に始まり、「地球其他の惑星の軌道は楕円形である、宇宙は楕円体であるといふ。真理も亦二元的であつて円満に解決し得る者ではない。艱難の坩堝の内に焼尽す火に鍛えられて初めて実得しうる者である」と論を結ぶ、極めて挑戦的な文章である。

この内村の文章の思想は、アブラハム・ヘッセルの名著『人間を探し求める神』（一九五五年）の一節「楕円思考（Elliptic Thinking）」の議論に驚くほどに酷似している。「Philosophy of Religion is involved in a polarity: like an ellipse it revolves around two foci: philosophy and religion. Except for two points on the curve that stand in equal distance to both foci, the more closely its thought comes to one, the more distant it is from the other. The failure to sense the profound tension of philosophical and religious categories has been the cause of much confusion. This unique situation of being exposed to two different powers, to two competing sources of understanding, is one that must not be abandoned. It is precisely that tension, that elliptic thinking which is a source of enrichment to both philosophy and religion.」

発表者は、両者の述べる「楕円」思想は根本的に「円」思想の一種ではありえないという理解を、「一、二中心点を保持する、二、論理的な一元化の試みを否定あるいは求めない、という前提を立てる両者の議論の姿勢において認め、その点において、いわゆる数学や宇宙物理学における科学的な「楕円」概念